

2017年11月26日(日)／説教者：國分美生

説教：「起きて、輝け」

聖書：イザヤ書60:1～4

11月是世界祈禱月間としまして、世界中で起きている痛みや、破れ、しわ寄せを、いつも以上に祈りに覚えながら過ごす月でした。

世界のバプテスト女性たちがつながり、特定の日に祈るこの企画を始めたのはヨーロッパの女性たちでした。第二次世界大戦直後の1948年、戦争と国家権力に翻弄され、取り残され、打ち捨てられた人々、とりわけ女性たちのために、ヨーロッパのバプテスト女性たちが行動を開始したのです。

戦争の混乱のなかで傷つけられた多くの同胞を何とか支えたいと、女性たちがやむにやまれず立ち上がったこのエピソードに、沖縄に生きる私たちは共感するところがあるのではないのでしょうか。なぜなら72年前の激しい、壮絶な地上戦で沖縄は徹底的に傷つけられ、その傷は今も、世代を超えて引き継がれつつあります。安全で穏やかな生活には、まだまだ程遠い毎日です。そうであればこそ、暗闇の中で隣人と手をつなぎ合い、力と希望を分かち合うことがどれほど命を支えるものになるのか、私たちは体験的に知っているからです。

主題成句として選ばれたのはイザヤ書60章です。「起きよ、光を放て」とは、本当に深い闇を体験する者にこそ向けられた言葉です。この預言者イザヤの救済の預言を、イスラエルの人々は「神が私たちを見捨てず必ず救い出し、立ち直らせてくださる」という預言がまだ実現していない不安と焦り、飢え乾きの中で聞いたのです。

しかし、60章は救いの希望に満ちた預言が書き綴られています。闇の中に現れる光の告知は、神の救いの到来のイメージを私たちに伝えます。3節、4節からわかるのは、イスラエルの人々が、自分たちだけでなく、自分たちにつながるすべての人々も、共に神の正義と平和の支配のもとに置かれる日が来るのだ、という希望を持ち続けていたということです。さらに、自分たちの神に対する信頼が神の国の到来に必要不可欠であることを確信していました。それは、神に背いていた罪を悔い改め神に向き直ることで、神の栄光を受けて輝くことができる。暗闇の中に輝き上る神からの光を反射する者となる、という確信でした。

21世紀、今、日本で、この沖縄で生きている私たちも、取り巻く社会の闇の中で、神からの希望を受けて反射させていくことができますように。(國分美生)